

沖縄や北海道より気分的に近い島・台湾（その3） 佐伯 順弘（岐阜県）

Travel planning

DAY1 5th JAN NGO→TPE
 DAY2 6th JAN TPE→KHH
 DAY3 7th JAN KHH ★
 DAY4 8th JAN KHH
 DAY5 9th JAN KHH→TPE→NGO

DAY3 (7JAN2017) 高雄

0700 覚醒。ぐだぐだと過ごす。0800 起床。

0820 朝食。ホテルは特に朝食付きを選ばない。その街の人が食べているものを食べてみたいし、多くの場合その方が安上がりだ。ついでに日本のほとんどすべての義務教育学校で指導されている「早寝早起き朝ごはん」というものに従うような素直な人間ではないので、必要のない朝食ほど体に害のあるものはないとも思っている。野生動物を見てみればよい。奴らは朝食を摂ってから行動するのではなく、行動後に食事をする。ならば、自然の一部である人間もそうすべきなのではないか。もっとも江戸時代までは一日二食、昼食と夕食だけだったという話も聞くので、現代人のように腹も減っていないのに何も考えず無用な熱量を取り込むのは最近の風習なのだろう。食事は車の給油とはちがひ、消化管に入った途端、消化が始まり、自動的に糖分が吸収され、使われないのに血中濃度が急上昇する。糖はインスリンの働きにより強制的に細胞に取り込まれ、細胞内でエネルギーとして使われなかったものは貯蔵されていく。急激に血糖値が上がれば、生命の危険を感じた体は急激にインスリンの量を増やすことで逆に低血糖を生む。血糖値が安定しなければ精神の安定もない。つまり、イライラして暴れる若年層ばかりか壮年、老年が増えるのもむべなるかなというところだ。車の給油ならば、タンクの容量以上は入らないし、エンジンをかけなければそのまま保存されるから車体には悪影響がない。しかし、人体はそうはいかない。だから、考えもせず無条件に朝食を食べるのではなく、腹が減っていた場合のみ、食べるようにすべきだ。腹が減っていないのに強制的に食べさせられることは断固拒否すべきなのだ。さらに給食と呼ばれる強制栄養摂取作戦に対しても戦いを挑むのが望ましい。腹が減るほど動いたり、腹が減るほど頭脳を働かせたりしていないお気楽な人間が時間割という理由だけで無理やり食べるから糖質中毒になるのだ。その結果、さらに糖質が欲しくなり、糖尿病、肥満症を発症するのだ。食糧自給率が低いなどと嘆いているのであれば、麻薬中毒患者と同等の糖質中毒患者の治療および不必要な糖質の取り締まりを強化し、体が欲していないのに中毒症状として糖質を食べたがる中毒患者を容赦なく逮捕し、芸能活動など二度とでき

なくなるようにするべきではないか。麻薬取締官と同等の責務をもつ糖質取締官を増やし、糖質中毒者を撲滅すべきではないのか。無駄な熱量を取り込ませるだけの糖質を製造したり流通させたりしている者も同様に取り締まるべきだ。その過程で日本全体の食糧流通量も抑えられ、当然フードロスなる罰当たりな現象も消えていこう。消費量が減るのだから、相対的に食糧自給率は上がるのだ。二宮尊徳も渋沢栄一も「道徳のない経済は罪悪である」という。金儲けの機会を逃さないために食糧を大量廃棄するような経済が道徳的なのははずはない。腹も減っていないのに、フォアグラを作るための鴨に穀物を流し込む如く児童生徒に完食を強制することも道徳的ではない。



おっと、目の前には空腹を満たす以上の料理があった。空腹だから食べるのではなく、その土地の食文化に対する尽きることのない探究心から身を犠牲にして食べるという崇高な使命感と共に心を入れて食事に対峙した。和洋折衷という言葉があるが、ここでは中洋折衷というか、中洋和混合というか半断しにくい料理が並んでいた。それだけに調査も簡単ではない。盛り過ぎるのは下品であるし、何度も往復するのもまた下品。このホテルでは何度もとりに行くことについては特に問題はないようだが、ホテルによっては眉を顰められる場合もある。海外に出た日本人が当然持たなければならない「一人一人が日本代表」という心構えからすれば、ここで無様な振る舞いをすれば、それはすなわち日本の恥、国辱となろう。様々な状況を考慮しつつ、無事に朝の調査活動を終え、部屋に戻る。今日は高雄日本人学校の跡地を見に行くことと足つぼマッサージを受けることを課題としているのだが、朝から頑張っていくこともない。ゆっくり過ごす。旅で大切なことは疲れるまで活動しないということだ。健康であってこそ感性も磨かれ、素晴らしい体験ができるのだ。

1040 衣類をクリーニングに出す。

1224 午前中十分休養を取ったので、出かけることにした。既に空腹を感じていた。昼食である。



「食坤」[食坤]大王（正確には食でなく食編）が店名だが、「金温州」（正確には金ではなく、温州の部分の中が人）が店名だかわからないが、ワンタン麺の店である。朝食を摂ってからそれほど時間が経っているわけではないが、食の追及のために、わが身を犠牲にして探究心を納得させねばならない。有名店らしく、かなり混んでいたが、こちらは身軽な一人旅、誰と相席になっても構わないし、そこそこ待っても構わない。間もなく店内に入ることができ、1人用の席が空いていたためあっさり席の確保ができた。



ワンタン乾麺（汁なしワンタン麺）は日本にあるようなものではなく、肉団子が餃子の皮を纏っているという感じで食べごたえがある。この店のワンタン麺は細切り肉と細切りザーサイが乗っているのが特徴とも言える。100元にふさわしいボリュームである。

1300 近くの鹽埕埔站から MRT で文化中心站へ行く。



1330 高雄日本人学校跡地。ここに来て何もなかったことはわかっていた。台湾の学校の空き教室に移転したと聞いている。それでも何かを求めて来てしまった。当然のことながら、楽しいことばかりではなかった、納得できることばかりではなかった。しかし、多くの学びと多くの出会いがここにはあった。それは間違いない。何か当時のものが

残されていないか、今はもう駐車場になってしまった跡地をぐるりと回ってみる。



これはバナナだったのだろうか。南国らしく、敷地内にはバナナばかりか、マンゴー、竜眼、ライチなどが生えていた。池にはメダカではなく、色とりどりのグッピーが泳ぎ、それを捕食しているであろうブレコもいた。ライチが生る季節になると台湾人の用務員さんが収穫して、昼食の時間に各教室へ持ってきてくれたものだ。

心が麻痺した感覚を味わいながら、暫しそこに立ちつくしていた。流すべき涙もない。ただ時は流れ去るばかりだ。目を移せば、高雄の街は今も活気にあふれ一時の感傷など一瞬にして霧散させてしまう。自分でもなぜそうしたのかわからなかったか黙とうを捧げ、高雄日本人学校跡地を後にした。



学校帰りに通った道。食べ物屋が並んでいる。学校のすぐそばなので、よく食べに来た。いろいろな店があるので、飽きることはなかった。通勤はバイクだったが、既に台湾の運転免許証も失効しているので、今回はのんびり歩いてみた。歩きすぎて疲れたので、バスに乗った。飲みに行くときなどよく使った路線なので、安心して乗ることができた。



交通カードで乗れるので、小銭の心配もいらない。バ

ス停のアナウンスは聞き取れるが、表示も出るので安心だ。

1450 ホテルに戻る。疲れた、自分が過ごした高雄日本人学校の校舎が消えたことに精神的ダメージを受けていたようだ。学生の頃からの習性で精神的ダメージを受けると眠くなる。少し寝た。

1600 ホテル発。まずは近くのMRT 站で交通カードに100元チャージ。バスに乗って、足つぼマッサージに向かう。



「左脚右脚」というチェーン店。まずはフットバスで足を温める。その間にも首や肩をマッサージしてもらい。足を拭いてもらい、足つぼマッサージ。必要事項なので「ちょっと痛い。」という言葉は最初に覚えた。マッサージを終え、昔よく言っていた苓雅夜市、自強夜市に向かう。夜市は道の名前がつくことが多いが、道が交差しているのこのようになる。

1840 蒸餃子の店に入る。親父さんは顔を覚えていてくれて、笑顔で迎えてくれた。こういう地元感がいい。



三鮮蒸餃+空芯菜の炒め物 90元。台湾の食べ物盛りが多すぎることなく、いい腹具合になるのがすばらしい。



この雑多な感じがいい。多くの店が集まっていて、台湾の人々は基本的に夜市で食事をする。家で料理をすること

は少ないらしい。値段もお手頃で、栄養バランスをとるのも難しくない。素食という肉を使っていない料理だけを出している店もある。セルフサービスで料理を取り、後で会計という店も多く。言葉がわからなくても大して困らない。住んでいけば、何度も同じ状況を体験するので相手が何を言っているのかなんとなくわかってくる。言語を習得する近道はそこに住むことだと言われるが納得できる。

蒸餃子の店を出てから、すぐまた行きつけの揚げ物屋に立ち寄り、トリカラを買う。日本のコンビニに売っている唐揚げと似たようなものだが、おいしさと安さはこちらの方が上だ。揚げ物屋の夫婦も顔を覚えていてくれて、「好久不見(久しぶりだね。)」と声をかけてくれた。この辺りの言葉も比較的よく使う言葉なので今では自然に出るようになった。

1926 バスでいったんホテルに戻る。



シャワーを浴びて、旅記録の整理をして、出かける準備をする。

2040 行きつけのバブへ向かう。以前、歩いて5分くらいのところに住んでいたが、今泊まっているホテルは少し離れているので、バスで向かう。この路線も良く使ったので安心して乗ることができる。バブのドアを押すと、知り合いのスタッフが笑顔で迎えてくれた。当然台湾の人々もいるが、欧米系と思われる人たちも多くいるせいか、BGMは洋楽が多い。80sから最新曲まで幅広くかけている。この店で知った曲も少なくない。ウィスキーの品ぞろえもなかなかで、ビールで始まって、ウィスキーで締めるというパターンがいつの間にか出来上がった。カウンターでMTVを観ながら飲んでいると話しかけてくれるスタッフも多く、ゲームを挑まれることもあった。(もちろん、負けると1杯奢られるのは定番である。)台湾語を習ったり、C-POPの最新動向を教えてもらったりした。今回もあの頃と変わらない風景がそこにあった。

「月日は百代の過客にして、行きかゝる年もまた旅人なり。」唐突に浮かぶ奥の細道。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。」続いて浮かぶ方丈記。変わらなれど、すべてのもは変化していくのだ。改めて認識しつつグラスを傾けていた。

(本日の会計) ワンタン乾麺 100, 交通カードチャージ 100, 足つぼマッサージ 1050, 蒸餃 90, トリカラ 50, バブ 1200, 担仔麵 40, タクシー 85 3日目現金支出合計 2715元 (つづく)